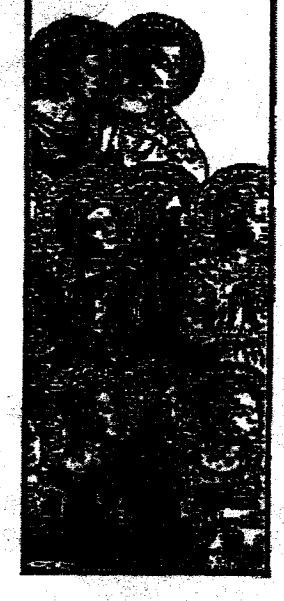
明治学院大学キリスト教研究所
ニュースレター

あんげろす



所長として２期目を迎えるにあたって

徐正敏

キリスト教研究所の関係者の皆様が、研究に大いに励まれ、多くの成果が出されますようにお祈りします。

この度、改めて研究所所長に選任され、2018 年度春学期より、所長として２期目を迎えることとなりました。経験も能力も不足しておりますので、皆様の積極的なご協力と参与なしに、この務めを果たすのは難しいと感じております。どうぞ皆様のご協力をお願い申し上げます。

これまでの２年間、本研究所ではいくつかの課題に焦点を置いて活動をして参りました。第一には、2017 年からアジア神学セミナーを開講いたしました。キリスト教研究所の５０年の歴史において、明治学院がかつて行ってきた神学教育プログラムを再興することは一つの大きな課題でありました。なかなか実現には至りませんでしたが、ようやく 2017 年度春学期に、１年コースのアジア神学セミナー研究課程を開設することができました。計画の段階では１０名の定員を目標としていましたが、２０名以上の受講登録・修了生を出すことができました。

→次頁に続く

第 76 号
2018 年 7 月

このアジア神学セミナーにはいくつかの大きな意味があると言えます。神学分野で再教育として「アジア神学」のような具体的なテーマを中心とする神学研修のコースが開設されたことに、まず大きな意味があると思います。また、この過程において、日本基督教団所属の神学教育機関である農村伝道神学校と協定を結び、同校から受講生が派遣されたことはもう一つの大きな意味と言えます。このことは、関東地域のいくつかの教育機関が協力して、共同神学課程のプログラムを用意する可能性が生まれたことでもありましょう。さらに、アジア神学セミナーの開講記念として、2017年秋には、日中韓国際シンポジウムを開催いたしました。明治学院大学キリスト教研究所、上海大学中国宗教社会研究センター、韓国中央大学中央史学研究所の間に研究協力協定を締結し、関連分野の研究協力活動を継続することになりました。それに関連して2018年は、韓国中央大学が日中韓協力の国際シンポジウムを開催予定です。

第二には研究所内の各研究プロジェクトを整理し、プロジェクトの統合などを図り、より効果的な研究活動が進められるよう改変しました。それに合わせて、新しいプロジェクトとして明治時代のキリスト教資料研究プロジェクトを創設し、明治時代の一次資料の整理、翻字をスタートしました。このプロジェクトのような作業は、日本のキリスト教と日本神学の研究において基盤になる資料研究であり、こうした研究が展開されることが研究所としての本来のあり方の一つを示していると思います。

これから、新たな任期の2年間も、研究所の活動をさらに発展することに尽力して参りたいと思います。まず、アジア神学セミナーは、2018年の春学期、多数の受講生を得て第2期を開講することができました。今後もアジア神学セミナーは、テーマ、方法論、目標などについて検討を重ね、より充実した内容にできるように努力したいと思います。次に、研究所内の各研究プロジェクトも、高水準の研究成果をあげられるようレベルアップしていくつもりです。プロジェクトの成果を、多くの研究者の皆様に提供し、活用していただけるような環境を整えていきたいと考えています。さらに、もう一つの課題は、オンライン上での研究所機能の要請に応えていくことです。今日、オフラインだけでなく、オンラインのレベルでの研究所の機能も求められていると思います。それに伴い、アジア神学研究のベースを本研究所に設置したいと願っています。本研究所のホームページにアーカイブ機能を持たせ、資料や研究成果の提供を図り、また特にアジア神学セミナーの成果もオンライン上で提供できれば、と思っています。

これからもキリスト教研究所の研究活動に、皆様のご協力と参与をお願いいたします。

そ・じょんみん（所長）

春第2回講義　徐 正敏所長

春第6回講義　李 省展協力研究員

シラーとドストエフスキーと私

鵜殿 博喜

ドストエフスキーに夢中になったのは高校時代のことである。高校１年生の頃は弓道部に所属し、それこそ弓道の練習に明け暮れた。家族が寝ているあいだに学校に行って的貼りをし、授業が始まる直前まで練習。授業が終わると日が暮れるまでまた練習、といった日常生活の中で、初段を取り、弓道大会などにも出場し優勝したこともあったが、次第に弓道に限界を感じ、１年生の終わりに退部した。２年生になって無性に本が読みたくなり、手当たり次第に本を読んでいったが、その中にドストエフスキーの『罪と罰』があった。家で読み、授業の合間に読み、こんなに胸に迫る小説は初めてであった。立て続けに３度読んだ。１度目は頭がカッカし、２度目は胸をドキドキさせながら、３度目は背筋に悪寒を覚えながら、とにかくすっかりこの小説の虜になってしまった。

大学に進学してドイツ語を専攻することになった。文学的な興味ではなく、ドイツかオーストリアに留学して、今でいうパテシエの修行をしたいと思ったからである。しかし文学への情熱は、ドストエフスキーの『貧しき人々』や『カラマーゾフの兄弟』、『悪霊』などを読みながら、シェイクスピアの悲劇、喜劇、歴史劇などにも傾倒していき、またそれは神学への情熱とも重なり、所属していたカルヴァン派の教会の影響もあって、カルヴァンの『キリスト教綱要』をよく理解できないままに全巻読み通したりした。一方、同級生から詩人のシラーの存在を教えられ、ドイツ文学の関係ではとりわけシラーに興味を持ち、卒論もその後の修士論文もシラーの戯曲について書くことになった。

若い頃のドストエフスキーがシラーに傾倒し、シラーを熱烈に愛読したことを知ったのはその頃のことで、ドストエフスキーとシラーが結びついた。

私がキリスト教に興味を持ち、洗礼を受けるきっかけの一つはドストエフスキー体験かもしれない。はっきりそうとは言い切れないが、クリスチャンになってからもドストエフスキーは読み続けた。ドストエフスキーはのちにシラーから離れていくわけだが、最後の作品である『カラマーゾフの兄弟』の中で、父親のフョードル・カラマーゾフが息子たちのことを紹介する場面で、自分や次男のイワン、長男のドミトリーのことを語るのにシラーの『群盗』の登場人物を引き合いに出しているのを見ると、ドストエフスキーの中にシラー体験が晩年になるまで残っていたのではないかと思ったものである。

明治学院大学に就職してずいぶん年月が経ってから、ドストエフスキーをロシア語で読みたいという欲求が強くなり、何度か独学で勉強を始めたが、途中で仕事が忙しくなり、文法書の半分は手垢で黒くなっているのに、後半の半分は真っ白という有様で、意欲はあってもなかなかはかどらなかった。２０００年にサバティカルで１年近く南西ドイツに滞在した時は、ドイツの友人の紹介で若いロシア人画家の夫妻と知り合い、週に１日だけだが、バスを乗り継いで、おもに奥さんからロシア語を習い、発音や読み方で収穫をえた。しかし役職の仕事が忙しかったり、難しい翻訳の仕事を抱えたりしていたため、それ以降まったくロシア語から離れてしまった。

定年退職して何をやりたいかと言えば、まずはロシア語を勉強することと、もう一度ドストエフスキーを読み直すことである。日本語訳の全集を複数揃えてあり、ドイツ語訳全集、ロシア語版の全集も手元にある。命がいつまで続くかわからないが、義務や責任から解放されて、時間はたっぷりある。ただ、記憶力は衰え、集中力も弱くなっているので、自分を鼓舞して人の何倍も時間をかける必要があるだろう。しかしドストエフスキーを読むことは自分の信仰に関わることでもあり、人生を楽しむことでもあるので、前進あるのみ。

うどの・ひろよし（名誉所員）

自筆史料を読むということ

坂井 悠佳

４月よりキリスト教研究所に客員研究員として迎えていただきましたことに深く感謝申し上げます。近代日本キリスト教思想史を専攻し、日本組合基督教会を主たる対象として、近代日本におけるプロテスタント（福音主義）キリスト教受容の問題を考えて参りました。遅々とした研究の歩みですが、皆様よりのご指導のほどをどうぞ宜しくお願い申し上げます。思想史研究に携わるようになって、感じてきたこと、思うことなどを記してみたいと思います。

歴史研究の魅力の一つは、その時代の人々が残した史料、一次史料に接することである。今日では、手書きで記録を残すことは珍しいことになっていると言ってよい。そんな時代だからなのか、自筆史料には何とも言えない味があるように思われてならない。史料から歴史的な事実を明らかにするのであれば、その史料が手書きだろうが刊本だろうが、大差はないのかも知れない。しかし、自筆史料からは、その史料を残した人物の姿が浮かび上がってくるような気がする。この史料が歴史上に生きた人によって残されたものであり、その人の存在を確かに感じるように思う。「文は人なり」と言うが、「文字は人なり」も真理かも知れない。

明治期にキリスト教を受容した人々も自筆の記録を多々残している。現在、キリスト教研究所における研究プロジェクトの一つである、明治時代のキリスト教史料研究プロジェクトでは松山高吉の関連資料研究が進められている。松山が一筆一筆、文字を記していった姿を想像しつつ読み進めている。丁寧な楷書であったり、大胆に訂正を加えたり、筆が走り過ぎていて判読が困難だったり、どんな状況でその文字が書かれたのか想像するのは実に楽しい。その松山高吉らと共に組合教会設立にあたり尽力したのが小崎弘道であり、彼の自筆史料もまた膨大に残されている。私がその史料群を初めて手にしたのは、卒業論文の執筆時である。卒論で明治時代の思想史、キリスト教受容史を扱うこと、誰かに焦点を当てて書くこと、は決めていた。ただ、誰を対象に研究するのかが問題であった。在籍していたのは文学部史学科である。史学科で思想史を扱うのなら、全集などの刊本だけではなく、自筆史料を用いた卒論を書きたかった。そんな時に小崎弘道の自筆史料の存在に思い至った。早速、閲覧しに行った。既に同志社大学神学部の所蔵となって久しい史料群であり、先行研究においても多々引用されている。存在を知らなかったわけではないが、それまでは見たいとは何故か思わなかった。卒論の題目を提出するという切羽詰まった状況になって、この史料に賭けてみようと思った。と言うより、これだけの自筆史料があるのだから何かしらのことは書けるのだと思うことにした。それに熊本バンドや組合教会のことは、以前から気になっていた。この段階になって、史料を見に行くとは何とも怠慢であるが、当時の私にそれを反省している暇はなかった。

数日間、開室から閉室までお世話になり、ひたすらページをめくった。小崎が熊本洋学校や同志社英学校に在学していた時代の講義筆記（大半は英語である）、牧師になってからの説教原稿、イギリスやアメリカの神学校のサマースクールに参加したときの講義筆記、著作の草稿、日々の備忘録やメモの類、講演や授業のための手控えのノート等々。ブックトラック一台に乗り切らないぐらいの分量があった。

自筆史料を見ながら、色々なことを考えた。学生時代の講義筆記を読み解けば、明治時代初期の神学教育の一端が分かるかも知れない。そう言えば、日本の神学校での教授内容についてあまり顧みられていないように思う。日本の神学校の草創期における神学教育の実際を明らかにすることは、今日の教会の背景を知るうえでも大切な作業であろう。熊本洋学在学時代も同志社英学校在学時代も、小崎は細いペンで丁寧に英文を記している。同時に筆書きの史料も残されている。江戸時代的な教育が近代的な教育に変化していく、まさにその移行期ならではの史料群である。その後、熊本洋学校卒業生の講義筆記を見る機会があった。先日の熊本地震で倒壊した、熊本洋学校教師ジェーンズ邸に保管されていた史料で、英作文や数学の解答が筆書きで記されていた。日本の若き青年たちが墨と筆を用いて、必

死に貪欲に、新しい知識を吸収しようとしていた姿が目に浮かぶようであった。災害や戦災等を経ても今日まで遺された史料があるということ自体が奇跡的なことであるが、熊本地震からの復興を願ってやまない。

さて、同志社英学校を卒業した小崎は牧師として立てられた。ごく初期の説教原稿は英文で記されている。その後すぐに、日本語、縦書き、筆書きになる。神学教育は英語で受けたが、伝道の対象は英語を知らない日本人であり、小崎はその間で苦慮したのであろう。英語、横書き、ペン書きの記述が、日本語、縦書き、筆書きに変化する。それは形式的な変化かも知れないが、西洋思想の日本的受容のあり方を象徴的に示しているようである。小崎の説教原稿は、説教の要旨をまとめた箇条書きに近い体裁であり、完全原稿ではないが、どういう聖書箇所が選ばれているか、どんな主題が扱われているか、小崎のキリスト教受容の何らかの特色を見出せるかも知れない。キリスト教思想の担い手のうちのある程度は、牧師、説教者なのであり、キリスト教思想史においては説教原稿も検討対象にすべきなのかも知れない。小崎の青年期の記録は多くはないが、その中には、東京基督教青年会や日本組合基督教会の設立に関する記述など、日本のキリスト教界形成期の生き生きとした描写が含まれている。壮年になると、B５版程度の大きさのノートに日々の記録と説教原稿とを記すようになり、これだけで100冊を超える。形式は、日本語、横書き、ペン書き、である。説教原稿も膨大に含まれるが、組合教会の重鎮としての小崎の活動が克明に記録されている。小崎は日々、記録を付けることを怠らなかったようであり、これらの記録をいつか丁寧に読み解いてみたいと思っている。

さらに小崎弘道は蔵書を大切に扱っていたようで、蔵書に番号を付し、蔵書票を貼付し、蔵書目録も作成している。厳密には自筆史料ではないのかも知れないが、彼の旧蔵書は500点余りが東京神学大学に残され、量は少ないが書入れがある。何に関心を持って読書をしていたのか、思想形成との関連が見出せるのか、検討してみたく思っている。

明治期の知識青年にとって、キリスト教は全く新しい体系、世界であった。新しい世界がそこには広がっていた。その新しさゆえに抵抗も拒絶もあり、一方で新たな世界へと踏み出していった者もいた。彼らはそこで新たな知識を貪欲に吸収しようとし、そこに自らが生きる場を見出した。若き小崎の自筆史料は、そうした息吹を今日に伝える。そして、それが年齢を重ねることで、どのような展開を見せたのか。一人の人間が生涯にわたって記し続けた史料はそのまま、日本におけるキリスト教の歴史を証するものである。キリストの福音が日本にどのように伝えられ、どのように広がっていき、今日に至ったのか、それは丁寧に史料を読み解くことで明らかになっていく。キリスト教はその担い手がいなければ、生きた信仰とはならない。この日本にキリスト教を信仰し、その信仰に生きた人が確かに存在した。だからキリスト教関係の著作は日本にも多々ある。それに加えて自筆史料はこのことをより強く感じさせる。その証を大切に受け継いでいきたいと思う。自筆史料に遺された文字の一つ一つがとても愛おしい。自筆史料との対話は尽きない。

さかい・ゆか（客員研究員）

着任のご挨拶

高橋 英里

2018年度より前任の杉田有衣さんの後任としてキリスト教研究所の教学補佐に着任いたしました。まだ慣れないところもあり、皆様にはご迷惑をおかけすることと思いますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

明治学院大学は私の母校なのですが、国際学部で4年間戸塚の校舎にいたため、白金校舎は馴染みがなく、校舎内で時々迷って同じ所をうろうろしております。それでも明学の何かしらの雰囲気や精神はまだ自分の中に残っていたようで、いざ身を置いてみると「明学らしさ」が自分の身体にあらためて馴染んできたように思います。

在学時では勝俣 誠先生のゼミでアフリカ地域を中心に格差研究を学び、世界の経済構造や人々の生きる権利につ

いて身近な問題も含めてゼミ生と共に考えました。卒論は賀川豊彦と大学生協をテーマとしましたが、研究所所蔵の賀川に関する様々な書物を見ると、卒論での理解は己の理想と程遠く、賀川の多様な人間的・思想的魅力にあらためて気づかされた次第です。

今年の3月には沖縄県の辺野古へ行き、日本と世界の権力と暴力の構造を目の当たりにし、深く考えさせられる機会となりました。この研究所で働くにあたり、世の中から人為的・組織的な暴力がなくなり、人々が生き生きと過ごせる社会を考えるためのヒントを得ることができればと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

たかはし・えり（教学補佐）

雑録

植木　献

年度が替わり、キリスト教研究所も新体制となった。所長、主任は継続、新たに坂井悠佳客員研究員、高橋英里教学補佐とともに、研究所を運営することとなった。日本文学を専門とする篠崎美生子、田中祐介所員、異文化コミュニケーション、アメリカ文学を専門とする森あおい所員が加わったことも朗報である。

研究所の資料にも新たな仲間が加わることになった。鵜殿博喜名誉所員より、18 世紀ドイツ敬虔主義関連資料を寄贈いただいたからである。紙面を借りてお礼を申し上げるとともに、実施に閲覧・貸し出しなど活用できるように準備していきたい。

実際の研究活動に費やされる多くの時間は孤独な、地道な作業がほとんどであるが、キリスト教をひとつの枠組みとして、多様な関心を持つ内外の研究者との出会いが与えられ、そこから課題と刺激が与えられることは感謝以外に言葉がない。

今年度もどうぞよろしくお願いいたします。

うえき・けん（主任）

研究所活動 -(2018 年 4 月～6 月)

「アジアキリスト教史研究プロジェクト」主催研究会

開催日時：2018 年 4 月 28 日(土) 13：30-15：30

開催場所：明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

発表者：村上志保(協力研究員)

「上海と北京における国際教会の状況」

2018 年度第 2 期　「アジア神学セミナー」

【2018 年度テーマ】 アジアキリスト教史

【開講日】 毎週月曜日 18:25～20:25

【開講場所】明治学院大学白金校舎 1558 教室

5/7　近代化とキリスト教 総論（大西晴樹所員）

5/14　近代化とキリスト教 韓国の場合（徐正敏所長）

5/21　近代化とキリスト教 中国の場合（渡辺祐子所員）

5/28　キリスト教と国家（原誠 同志社大学教授）

6/4　新井奥邃と田中正造

足尾鉱毒事件から見るキリスト教（播本所員）

6/11　植民地支配下のキリスト教

（李省展　恵泉女学園大学名誉教授）

6/18　戦時下日中キリスト教関係史(松谷曄介協力研究員)

6/25　キリスト教「受容」のかたち 1 内村鑑三論

（ミラ・ゾンターク 立教大学教授）

新着図書

・『説教黙想　アレテイア』No. 100、日本基督教団出版局、2018。

・『説教黙想　アレテイア』No. 101、日本基督教団出版局、2018。

・『福音と世界』No. 4、新教出版、2018。

・『福音と世界』No. 5、新教出版、2018。

・『福音と世界』No. 6、新教出版、2018。

・『福音と世界』No. 7、新教出版、2018。

・『賀川豊彦研究』第 66 号、本所賀川記念館、2018。

・『キリスト教文化』第 8 号、かんよう出版、2017。

・『キリスト教文化』第 9 号、かんよう出版、2017。

・『Amos　A New Translation with Introduction and Commentary』、Yale UNIVERSITY PRESS、2017。

2018年度メンバー

所長　徐 正敏

主任　植木 献

所員

教養教育センター ： 篠崎 美生子、嶋田 彩司、田中 祐介、永野 茂洋、渡辺 祐子

文学部 ： 久山 道彦、齊藤 栄一、播本 秀史

経済学部 ： 大西 晴樹、手塚 奈々子

社会学部 ： 坂口 緑、佐藤 正晴、深谷 美枝

法学部 ： 鍛冶 智也

国際学部 ： 森 あおい

(以上17名)

名誉所員

鵜殿 博喜、遠藤 興一、小田島 太郎、加山 久夫、久世 了、佐藤　寧、司馬 純詩、
柴田 有、千葉 茂美、辻 泰一郎、中山 弘正、新倉 俊一、橋本 茂、真崎 隆治、
丸山 直起、水落 健治、森井 眞、山崎 美貴子、吉田 泰

(以上19名)

客員研究員

坂井 悠佳、土肥　歩

(以上 2名)

協力研究員

Andrew H. Ion、李 省展、稲垣 久和、今村 正夫、岩田 ななつ、岡田 仁、岡田 勇督、岡部 一興、
岡村 淑美、加藤 拓未、神山 美奈子、香山 洋人、木村 一、金 香花、清澤 達夫、小林 孝吉、齋藤 元子、
佐藤 飛文、朱 海燕、徐 亦猛、鈴木 進、高井 啓介、高井 ﾍﾗｰ 由紀、高橋 一、竹田 文彦、辻 直人、
豊川 慎、中井 純子、中西 恭子、西元 康雅、洪 伊杓、堀 朋平、牧 律、松谷 曄介、松山 健作、丸山 義王、
宮坂 弥代生、村上 志保、村上 文昭、横山 正美、吉馴 明子

(以上41名)

教学補佐

高橋 英里

あんげろす　ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす　第76号

2018年7月10日　発行
明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37
TEL:03-5421-5210／FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷　浩